

巻頭言

循環制御医学会の将来に願う

高折 益彦

今回、第17巻1号の巻頭言を書くように依頼され、いままでこの雑誌の編集委員を続けてきた者の一人として過去の思い出と、将来への希望とを述べさせてもらいたい。

そもそも日本循環制御医学会の発足の主旨は以下の如くであった。

すなわち当時も今も循環の生理、薬理を含め循環器病の臨床を研究し、検討する学会、研究会は数多くあるが、それらの会員が一堂に会し討論し、意見の交換をする機会は少なく、とかく互に井の中の蛙になりやすいことを避けたいとするものであった。当時の事務局長は麻酔科学教室に籍を置く徳島大学の斉藤教授ではあったが、学会の運営のみならず、本誌の編集、企画にも麻酔科以外の先生に多く加わって頂いた。そしてこのことを基本として学会も、本誌も現在まで続いて来ている。したがって本学会の検討テーマもまた、本誌の主題テーマも決して麻酔学に片寄ることがないように努めて来ている。この大原則を忘れることは本学会、ひいては本誌の医学界における存在を消滅させることにもなり兼ねない。そしてこの集学的精神が将来も必ず続くことを強く望んで止まない。

さて過去を振り返ると、第10巻あたりまでは原著論文の投稿が少なく、編集委員の一員として私も他誌に投稿予定であった論文を本誌に投稿したこと屢々であった。しかしこんなことを行わなくても現在は幸いにして各号毎、多くの原著論文の掲載が出来、学会機関誌として面目を保つことが出来るようになり、やっと落ち着いたと言う気持で一杯である。

しかしこれも手放しで喜べないかもしれない。なんとすれば、原著論文が雑誌の多くを占めると反面、特集、シンポジウム（現在は経費の面か

ら消失したが、以前は年一回は誌上シンポジウムとして座談会も合わせて掲載していた）が少なくなり、他の学会機関誌同様、あまり読まれなくなってしまう懸念もある。現在でも講座、機器紹介、新薬紹介、質疑応答、コラムなど、商業誌的側面も兼ね備えて、なんとか読者に読んで頂く努力を続けているが、このような企画は今後も必要となるのではなからうか。とくに本学会には会員相互の交流を計る News Letter の会員への配付がない。この分も本誌は引受る立場にある。したがって今後はこのような面を賄う構成も考えるべきかと思われる。

また当初のもう一つの問題点は刊行費の著しい赤字であった。そのため東京の印刷社から広島印刷社に印刷、編冊を移す努力や、本誌を完全な機関誌とし学会員全員に各号を配付する（以前は総会号のみ配付で、後に学会年会費を値上げして現在の姿となった）努力を行った。

現在の本誌は他の学会誌と比較して、その内容からして決して見劣りのするものではない。しかし本誌は quarterly journal であり、他誌のように monthly あるいは bimonthly journal ではない。機関誌が quarterly であるのと bimonthly であるのとでは評価に大きな差が付けられる。現在の各号の頁数からすれば、これを3/4に薄くしても決しておかしな体裁となるわけではなく、むしろ読者には読みやすくなり、扱いやすくなるであろう。この点も本誌編集の今後の課題である。会員の方々が良い原著論文を益々多くご投稿されることを希望するとともに、編集関係者もより良い企画を次々と出して、本誌が医学界で重要な役割を占めるようになることを望んで止まない。